



安佐准看護学院ナイチンゲール祭 令和5年5月10日開催

## 認知症サポーター養成講座の開催を通して

安佐准看護学院37期卒業生 医療法人社団恵正会 二宮内科 四辻一美

私を大切に育ててくれた祖母。約30年前のある日、おなかがすいたと言ってカイロを食べようとしていた衝撃的な光景は今でも忘れられることができません。

当時は認知症という言葉はなく痴呆と呼ばれた時代。社会の偏見もあり、痴呆の人を受け入れてくれる施設は少なく、周囲を山で囲まれた遠方の施設でつなぎの服に施錠された部屋で過ごす祖母の姿を見て、悲しい気持ちでいっぱいになったことを鮮明に覚えています。その後、祖母は認知症の症状が進行し数年で旅立っていきましたが、当時の私は幼かったこともあり、何もできずただ見守ることしかできませんでした。

安佐准看護学院を卒業して5年、医療現場に出て感じたことは、独居や高齢夫婦で暮らしている方が多く、認知症に気づくのが遅れ、関わらせてもらった時にはすでに在宅生活が困難な方達、家族と同居されていてもどこに相談に行けばよいかわからず、困っている人達がたくさんいることを知りました。

一昨年前より地域包括センター・自治体の方々の協力を得て、認知症サポーターキャラ

バンメイトとして「認知症サポーター」の養成に関わっています。これは、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、医療従事者や専門職と共に地域全体で認知症の人やその家族に対して無理のない範囲で手助けをし、認知症高齢者が住みやすく、やさしい地域づくりを行っていくことを目的としています。先日、母校でもある安佐准看護学院の先生より、コロナも落ち着き実習に出始めた学生達にナイチンゲール祭で認知症について話してもらいたい旨の依頼を受けました。まず学生に事前アンケートをとり、現在認知症について知っていること、知りたいことを確認しました。知りたいことで最も多かったのは、「もし家族が認知症になったら最初に何をしたらいいのか」続いて「認知症の方への接し方、声のかけ方や対応方法が知りたい」でした。当日は、標準テキストに加えて普段私が勤務する入院病棟でのことや、これまでに関わってきた認知症の方やご家族がどのような場面で困り、不安に思われているか、そしてその時にさせていただいた関わり方の工夫などを具体的にお伝えさせていただきました。